

とは確かであるが、遊動コースの年次変動はその年の気象条件、特に積雪量と融雪期の違いにかかわることが、I群の東側の群れ、Z群の人家寄りの群れの行動から推測できる。

課題 3

ヤクザルの糞分析による上部域・下部域における食性の比較研究

大竹 勝 (日本モンキーセンター)
長井 三郎 (屋久島産業文化研究所)

ヤクザルの野生群における高度差による食性の違いを明らかにするために、前年度につづいて定期的に同一地域で糞の収集を行い、秋にむれの分布状態を併せて調査した。

上部域は、黒味林道1000m~1200m地点で90個、下部域は、西部林道川原地区で100個、合計190個の糞の収集を行い、水洗乾燥後に実態顕微鏡下で分析した。糞の数が1988年度より少なかったのは、上部域・下部域共に群れの林道利用率が低下していることがあげられる。上部域では黒味林道最奥部までシカ猟が行なわれ、犬の糞を林道上で発見したこともありヤクザルの遊動域がかなり変化したと思われる。下部域の西部林道瀬切地区の道路改修工事のため前年度収集地域での収集が困難となり川原地区の群れの糞の収集を行なった。

糞分析の結果は前年度と同じ傾向を示しているが、特筆すべきは上部域の糞からシキミの種子が検出されたことである。1983年夏の調査でシキミの枝先食を直接観察をしているが、シキミの種子が糞から検出されたのは初めてである。毒性が強いとされる果実を上部域のヤクザルが常食としているのか。偶発的に食しただけなのかは今後の調査の課題である。8月の糞ではハウロクイチゴの種子が糞内容に点める割合が非常に高く、出現率も高い。この中にコバノフユイチゴの種子が量は少ないが、高い出現率を示している。このことからイチゴの季節に上部域のヤクザルはこの果実を求めて遊動していると考えられる。

下部域ではアコウの種子の出現率は高いが、前年より量が少ない。また前年少なかったハナガサノキの種子量が多い。これは瀬切と川原の植生の違いなのか種子の稔りの多少によるものか今後検討が必要である。秋の西部林道域の糞から多量の

昆虫断片が検出されたことも前年度との違いである。

いずれも細片であるがほとんどが半翅目同翅類の小型昆虫と思われる。この仲間は枝先に集中して見られること、年によって大量発生することなどから、捕食が容易で大量に食したと考えられる。

昆虫は植生と同じで上部域、下部域によって分布する種が異なり、昆虫食について不明の点が多く今後の調査で明らかにしたい。

課題 4

ニホンザル放飼集団における優劣・順位の形成と維持

待田 昌二 (大阪大)

ニホンザルでは一般に集団成員間に安定した直線の順位序列が存在するが、反発的行動は常に一方向的であるとは限らない。本研究では、順位序列と一致しない行動が起こる条件を分析した。観察は京都大学霊長類研究所の放飼集団(嵐山出自)を対象として行なった。本研究では当歳児を除く全個体を観察対象とし、集団成員間に生じた反発的行動をaudio tape recorderに口述記録した。得られた資料は、以前に待田が大阪大学勝山第2実験所のニホンザル放飼集団においてほぼ同じ方法で記録した資料とともに分析され比較された。

2個体のみの関わる争いにおける反発的行動、すなわち、Facial threat, Threat call, Chase, Physical assault, Bared teeth, Screamingをそれぞれ直線の順位序列に最も近くなるよう並べると、Threat callとBared teethにおいてかなり矛盾の少ないマトリックスを得ることができ、それは非交尾期にad lib sampling法により観察したSupplantによる順位序列とほぼ同じであった。その他の4種類の行動では10%~25%の割合でSupplantによる順位と一致しない例が観察された。それらの事例は4種類のどの行動においても、順位の近い個体間及び未成体がloserの場合に有意に多く生じた。以上の結果は両集団とも共通していたが、嵐山集団では未成体雌の関わる争いで多く観察されたのに対し、勝山集団ではむしろ未成体雄においてより不安定であった。勝山集団におけるこの様な傾向は観察終了後に起こ